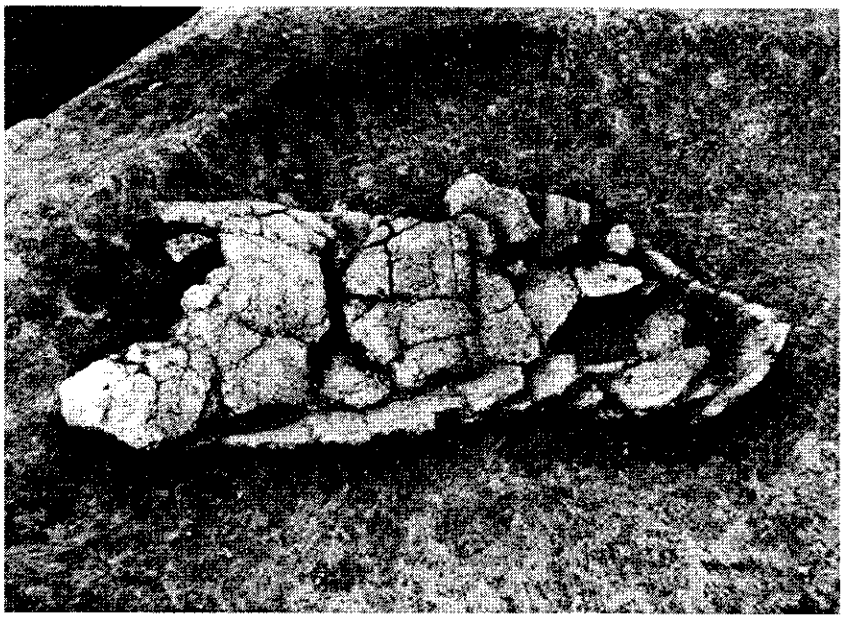
長岡京右京二条四坊一・八・九町
（上里遺跡）
現地説明会資料



甕棺墓出土状況

2003年4月26日

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京二条四坊一・八・九町　発掘調査現地説明会

場　　所　　京都市西京区大原野石見町地内
期　　間　　2003年1月6日～　継続中
調査面積　　約6000㎡
調査主体　　（財）京都市埋蔵文化財研究所

1　調査の経過

本調査は京都市建設局街路部街路建設課による伏見向日町線道路建設に伴う発掘調査です。調査地を含む周辺の地形は西から東に延びる低位段丘にあたります。

当地域では2001年11月から2002年3月にかけて試掘調査を行い、古墳時代～中世の遺構・遺物を確認しました。

その成果を踏まえ、遺構・遺物包含層が良好に残存していた調査箇所を中心に調査を今年1月より実施しました。調査区は道路予定地の現東西道路を境に、北側をA地区、南側はB地区とし、事前に付した田・畑地の番号を基に東から、A地区を1～16に、B地区を4～10に分けて調査を行いました。調査の結果、縄文時代晩期の甕棺墓、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居・溝、長岡京の一条大路南側溝（？）・建物・井戸、中世の耕作溝など各時代の遺構・遺物を発見しました。

2　検出した主な遺構

長岡京期の遺構

溝1　一条大路南側溝の推定線南で、調査区東西全域にわたり約270mを確認した。溝幅は最大1.3m，深さ最深 0.5mでした。

建物1　東西3間×南北3間以上の北庇建物です。柱間は2.65m間隔になります。

井戸1　円形縦板組の井戸（直径1m、掘形3×4m）です。掘形の四隅に柱穴があり，上屋があったようです。

古墳時代の遺構

竪穴住居1　南北4.2m、東西3.5m、柱穴4ヶ所と炉を北側中央で検出しています。壁溝が0.2m～0.3mの幅で残存していました。

掘立柱建物1　溝2に平行する2間×2間の総柱建物です。

弥生時代の遺構

方形周溝墓1　墓壙の本体は削平されていましたが、周溝部分（最大幅1.5m、最深0.6m）が残存していました。コーナー部は浅くなっています。

縄文時代の遺構

甕棺墓群　縄文時代晩期の船橋式の鉢を横向きに埋納した甕棺墓がほとんどで，現在までに5基を検出しています。

3　出土した主な遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代晩期から中世までのものがあります。特に５世紀後半～６世紀初頭の須恵器（杯蓋・身・壺・甕・甑）土師器（壺・甕）など古墳時代のものが多く出土しています。なかでも注目される遺物としては、Ａ１・２区の竪穴住居１から出土した、初期須恵器の特徴をもつ把手付き椀（完形を含め３個体）があります。

長岡京期の遺物はＢ６区の井戸内から土師器（皿・椀・短頸壺・甕）須恵器（壺・長頸壺・甕）などが一括で出土しています。

4　まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期から中世までの各時期の遺構・遺物が発見され、平安時代以降として確認されていた上里遺跡が更にさかのぼる遺跡であることを明らかにすることができました。

今調査で明らかになったことは

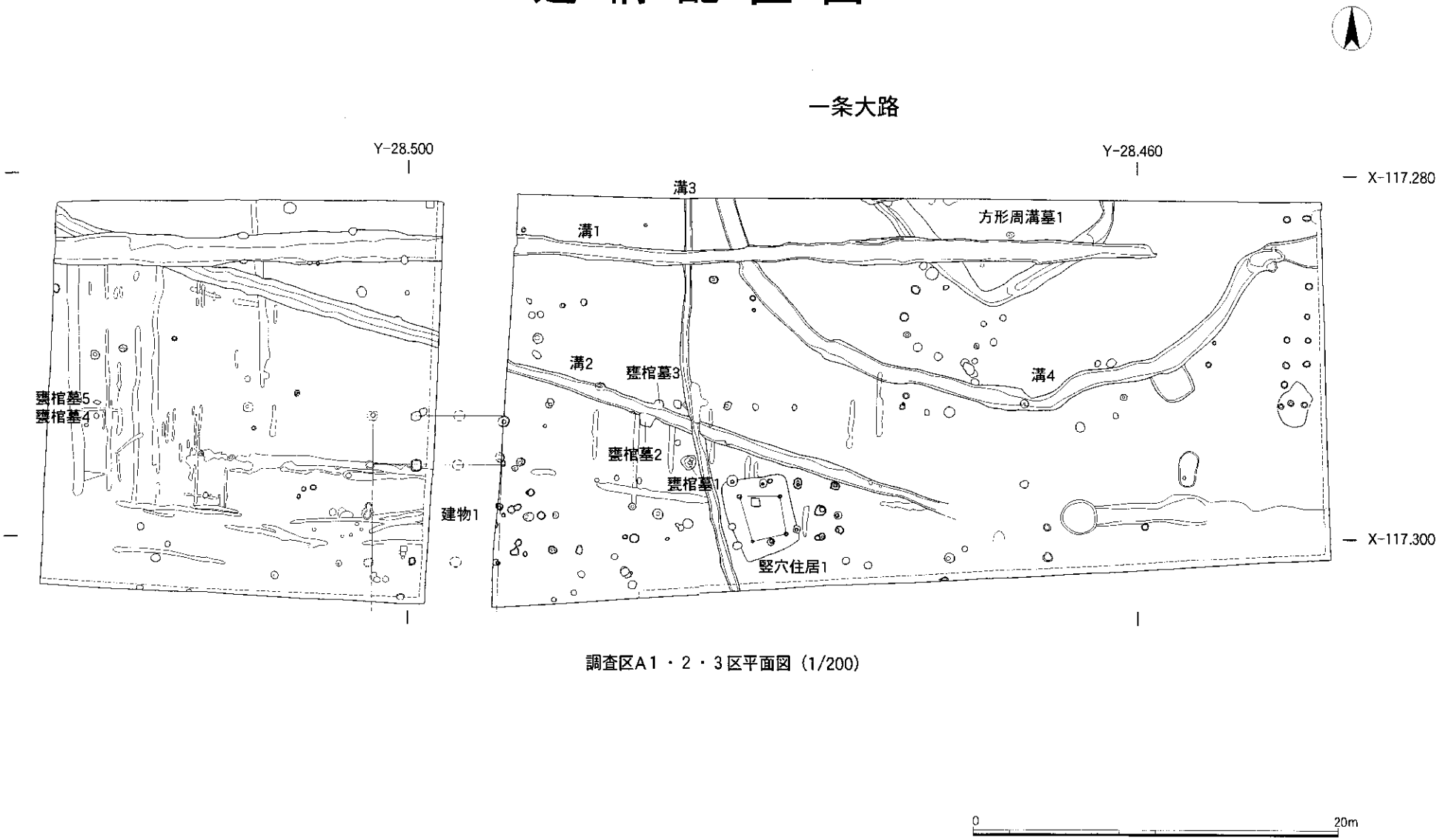
・縄文時代晩期の甕棺墓群の発見があります。墓域の規模や範囲は今後の課題ですが、近隣への墓域の広がりと、集落の存在が予想されること。

・古墳時代中期の竪穴住居群検出は京都盆地での古墳時代集落の変遷を知る上で重要な資料となること。

・一条大路南側溝（？）を東西約270mにわたり検出したが、従来の条坊推定線からは南にずれ、右京域の一条大路推定線について検討をあたえる結果となったこと。

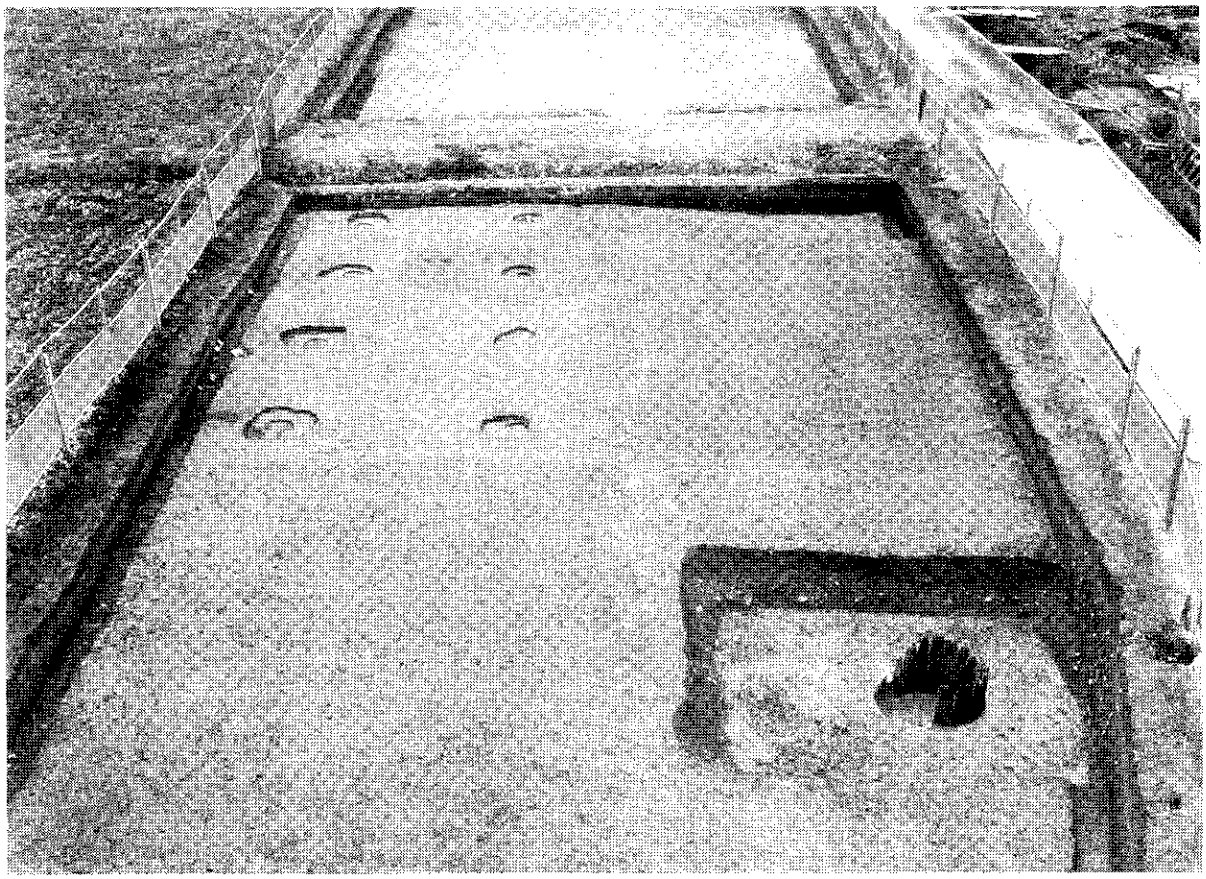
・右京二条四坊一・八・九町域では南北方向の小路推定地で、関連する遺構が検出できなかったことで、小路が造られていなかった可能性があると考えられること。

遺構配置図



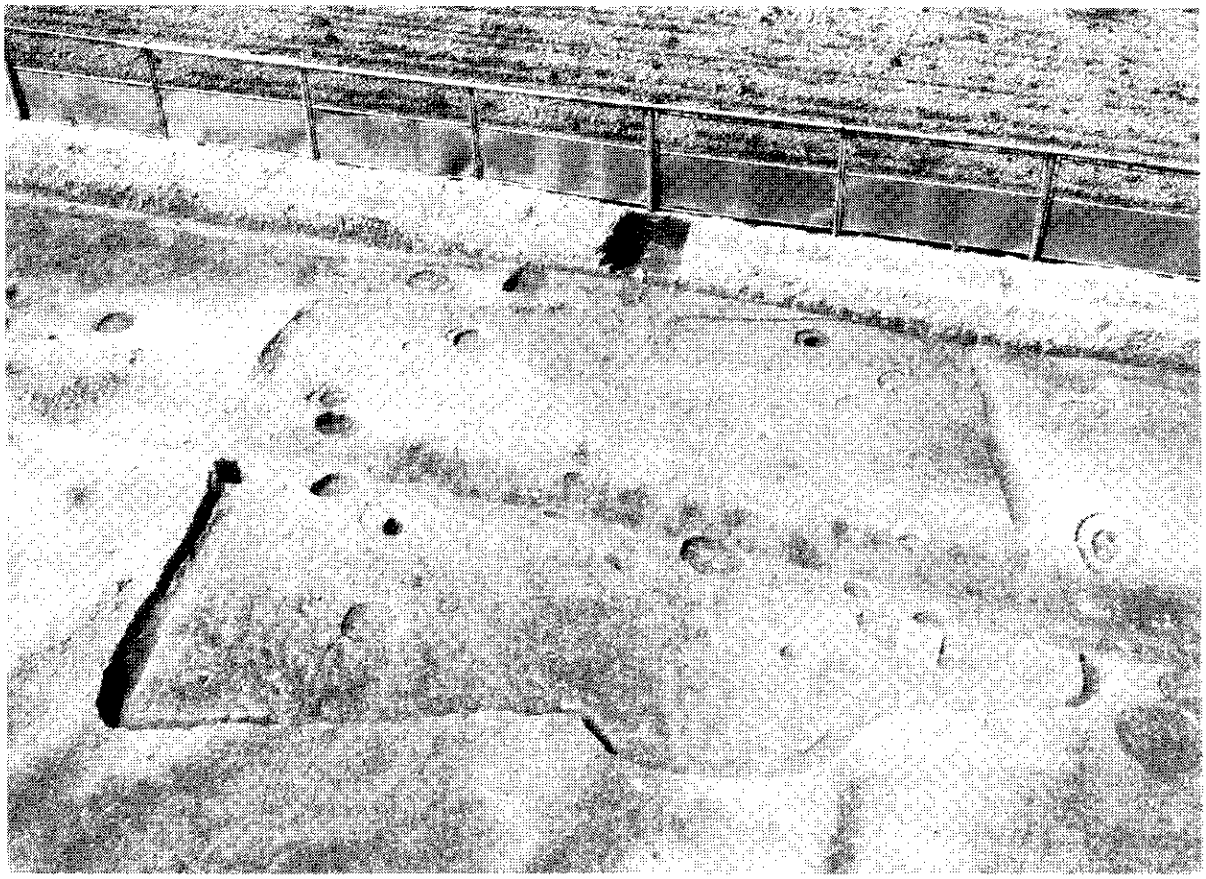
調査区A1・2・3区平面図（1/200）

一条条間大路
一条条間南小路
一条大路
二条条間北小路
二条条間大路
二条条間南小路
二条大路

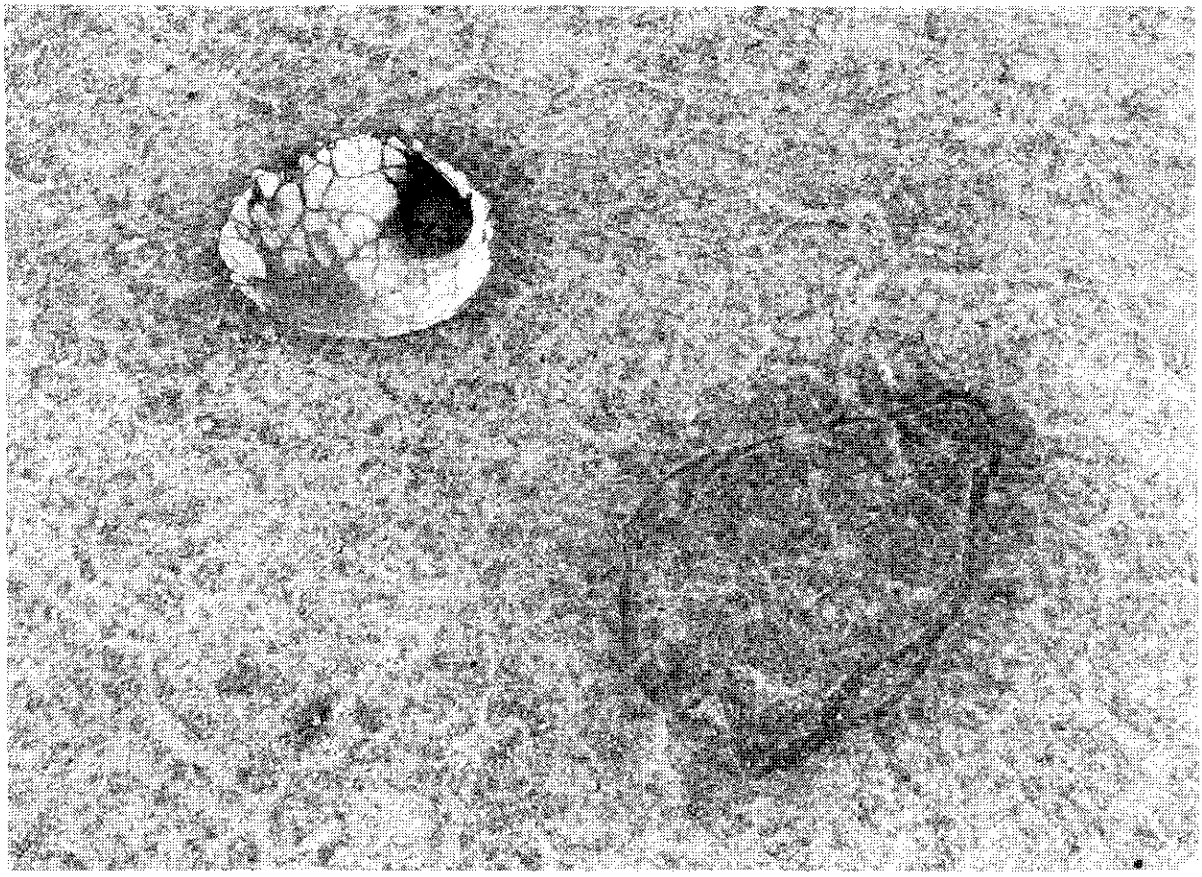


建物と井戸（長岡京期）

建物（長岡京期）



竪穴住居（古墳時代）



甕棺墓（縄文時代）